寺院実態調査報告 II

地域社会の変容と寺院問題

一、島根県横田町・大森地区の場合

高橋 謙祐
（現代宗教研究所員）

はじめに

昨年来、日蓮宗現代宗教研究所は、過疎地域における日蓮宗寺院の現況実態調査を行なってきた。昭和五十九年度も引き続いて島根県と北海道東部における寺院の現況調査を行なった。宗務所の要請もあって、島根県は、比較的過疎の進んでいる仁多郡横田町と大田市特に石見銀山とその周辺地域、そして隠岐島を対象に、地域社会の変動を受け、後継者難に置かれている寺院の実態を調査した。宗務所より、その寺院の置かれている現状の説明を聞き、住職や檀信徒を訪ねて現況を聴取し、寺院を実地踏査した。以下、調査し、把握した島根県日蓮宗寺院の概況を報告する。横田町・大田地区寺院は所員高橋が、隠岐島の寺院状況については、久住謙是主任が各々整理しまとめた。

島根県の概観

古来より出雲を中心に豊かな文化をもってきた島根県は、国土庁過疎対策室編『過疎対策の現況―昭和五十六年版』によると、県の総面積の七一％が過疎指定地域で、鹿児島県・宮崎県につぐ、過疎地域面積をもった県である。現在、島根県の五十九全市町村中、過疎地域市町村は四十、実に全市町村の六八％が過疎現象に悩む市町村である。人口も全人口七八万四七七九人中、過疎市町村人口二四万五九六三人、全県の三一％強の過疎地域人口をかかえ、その率は鹿児島県についで二番目である。この過疎地域四十市町村の昭和三十五年から五十五年までの人口の流出はというと、その減少率は三二％で全国平均を下まわっている状況にはあるが、島根県から、ましてや過疎市町村における人口の流出は、今日なお続いている状態である。

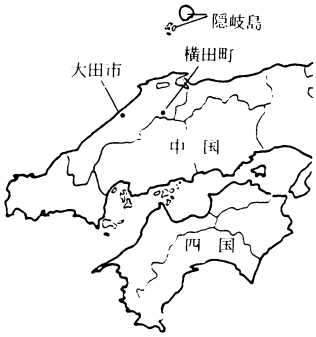
島根県は、周知のとおり、出雲地方の稲作を中心として古来より開かれ、朝鮮や九州経済圏と早くから文化の交流をもってきた。割合と自然条件が整い、島根の持つ立地条件が活かされて、農林水産業を中心として自給自足の自然経済で十分に成り立ってきた。しかし近代化の中では、東と西の中心地からは一番遠くに位置するという地理的な制約から、後進性が顕著となって、第二次・第三次産業の進展は、他県に比べると、決定的に立ちおくれてしまった。そしていま、第一次産業も半減した。

高度経済成長促進政策によって産業の中心が農林業から工業へと移って、人も資本も農山村から都市部へ集中した、昭和三十年以降、農林業を県の主産業としてきた島根県は、ことに人口流出がはなはだ著しかった。そのため今日では、人口は八十万人を割り、鳥取県につぐ県人口の少ない県となっている。従来、県をささえてきた農林業は、林業は外材の輸入によって、農業は離農の促進をもって農業の近代化を図った国や県の農業政策によって生活基盤に変化

を来たし、農林業地域からの人口の流出を招き、挙家離村現象を急激に現出せしめた。こうした現象は、島根県でも山間部に入れば入るほど顕著に現われている。

その上に、昭和三十八年、三十九年、四十年、四十七年と続いた豪雪・豪雨による自然災害は、斜陽化にある農林業に携わる人々の生活に決定的な打撃を与えたといわれる。農業人口の流出と対応して農業の機械化が行なわれることによって、過疎地域でもかろうじて農業従事者をとどめることはできたものの、それは全国的にみられる兼業農家、それも土日（どにち）農家（月曜から金曜日まで会社づとめ、休みの土・日曜日に農業につくというやり方）、いわゆる第二種兼業農家であって、従来の専業農家は減少している。学校卒業の若者は、一様に辺地から都市部へ、あるいは県外へと出ていき、ついで親たちが続き、残った農山村は骨組みのあらわな廃屋がめだっているという。

次に、寺院の状況をみると、島根県には、現在一三八二の寺院がある（『全国寺院名鑑改定版』、昭和五十一年刊）。浄土系が六三二カ寺、禅宗系が四七三カ寺で、浄土系・禅宗系が全寺院の八割を占め、日蓮系は八十四カ寺で一割にもみたない。このうち日蓮宗寺院は『全国寺院名鑑』には七十二カ寺と記載されているが、『日蓮宗寺院名簿』では六十七カ寺を数える。教会・結社は存在しない。『全国寺院名鑑』に記されている寺院数と『日蓮宗寺院名簿』数とでは、五カ寺の差をみるが、いまはこれを追跡しえない。



島根県寺院調査地区

島根県は大きく出雲と石見の二地方と隠岐とに分けられるが、日蓮宗寺院の分布は、石見より出雲地方に多く存在し、特に出雲市・平田市に集中している。六十七カ寺の日蓮宗寺院の内訳をみると、住職寺五十九カ寺、代務寺五カ寺、名簿上住職名不明寺院三カ寺となっている。それらの中、今回の調

査では、無住の寺院が明らかなもので十三カ寺、そして寺院名は名簿に記載されてあるものの、寺院の実態の全く存在しない寺院が数カ寺あることがわかった。寺院の後継者難は、過疎地域の農山漁村における寺院等級の低い寺院に、全国的に共通してみられる現象であるが、島根県寺院でも、全体の四割強が後継者難を訴えている。

なお、隠岐島の状況については、後に述べるであろう。

横田地区寺院の現状

昭和三十二年に旧横田町・鳥上村・八川村・馬木村が合併してなった仁多郡横田町は、奥出雲と称され、中国山地のほぼ中央に位置し、東は鳥取県、南は広島県に接している。東西一八・七km、南北一六・五km、総面積一万八九一九ヘクタール、山林原野が八四％を占め、町域の六五％が五〇〇m以上の高冷地、平地標高約三五〇mに約九％の農耕地がある。そして冬の間、約九十cmの積雪にみまわれる、豪雪指定地域である。町の中心部は、斐伊川の谷が広くなった盆地に発達し、東西に長く水田が開けている。横田町は、昔から仁多米や仁多牛を産出してきた農業を基幹的産業としてきた町で、就業人口の六四％が第一次産業に従事してきた。その後、高度経済成長の各種の政策によって、その人口が昭和五十五年までに半分に激減した。専業農家は著しく減少し、兼業農家特に第二種兼業農家になる傾向にある。そのため、減少傾向にある今日、農家の経営規模の拡大や複合農業化を図るなど、農業構造の改善が実施されている。

また横田地域は、かつて鑪（たたら）製鉄の産地としても栄えていた。横田では、絲原家が砂鉄採集―鑪製鉄を開拓し、玉鋼（たまはがね）の雲州鉄を産出してきた。明治以後、産業の変革で鑪製鉄業が衰退していくなかで、そろばん製造技術の導入に力が入れられ、一時は全国の七〇％の生産量を占るまでになるなど、そろばん製造が町の産業の一翼をになっていたが、

今日、電機計算器の出現でその生産も減少ぎみにあるという。今日では、縫製工場や他の製造工場が誘致されるなど、第二次産業がのびている。

人口動態については、昭和三十年に一万三〇〇〇人を超えていた人口は、過疎のため昭和五十年には九千人台に定着しており、ひところの激しい過疎状態ではない。年齢別人口構成は、十五歳から三十五歳までの層が大変少なく、若年層が流出しているのがわかる。若い人は公共の職場に勤める以外は、大部分の人が町外や県外に職を求めて出ていく。縫製工場が誘致されても、若い人はきらって勤めず、そこは農家の人達の第二の職場になっているという現況である。そんな中でも、農村へのUターン現象が、若干ではあるが、今日みられるという。

現在、横田町には、十七の寺院（真言宗二・浄土系二・日蓮宗五・禅宗系八）があり、日蓮宗寺院は五カ寺あって、横田町の中心部に一カ寺、中心部より車で二十分ほど峠を越えて行ったところ、馬木（まき）に四カ寺ある。

島根県の日蓮宗の教線は、富士門流の上行院日尊（一二六五―一三四五）によって開拓され、その弟子本覚法印日大など日尊門徒が早くから布教を展開した。県内には、旧本門宗の寺院は四割近くあって、日尊や日大を開山とする寺院が十数カ寺ある。そのなかで、馬木こそは、日尊が布教を展開して出雲地方の開教の基盤を築いた、宗門史に残る、歴史的なところである。日尊の出雲地方の開教は、馬木にて他宗徒を破斥して他宗寺院を改宗させたことに始まる。それ以来、馬木は法華宗徒の村となったが、その後、横田へは禅宗が進出し、いまは禅宗徒の多いところとなった。そして馬木は、横田町の中でも比較的過疎の進んだ地区になっている。

A寺

A寺は、馬木の中心部に近いところにある、住職常住の住職である。日尊の創立にかかり、寛正三年に小字渋谷より現地へ移転、再建・焼失をくり返し、安永三年に再建されて今日に至る。絲原家の菩提寺であるA寺は、現住職が

昭和五十年に入寺するまで五年ほど無住であった。病弱の先代の頃、離檀があったが、いまは若干増えて一一五軒の檀家をもつ。住職は法務に専念し、寺庭婦人が教職に就いて寺族の生活をささえてきたが、昨年その婦人が亡なり、いまは檀信徒の布施が収入源となり、一人なら経済的には不自由はないというが、後継する意志のある子供の後継育成には、それのみでは苦しいという。寺院の護持は、護持会より課金が収められるが、土地柄寄付を仰ぐのはむずかしく、寺の修繕は住職個人がやる。

出雲地方全体にわたってそうであるというが、時代が変わっても、昔の地主と小作の地縁関係が残り、村に一人いるかいないかの大地主――昔ながらの名士であるが――これを檀さん（檀那さん）、その妻を奥さんと呼び、普通の地主を親方、その妻をおかっさん、小作人をおっさん、その妻をおばさんと呼ぶ習わしは、いまなお日常生活に生きており、これをまちがえると大変で、葬儀・法事・戒名授与などは、たとえその家が没落していても、昔ながらの家の格で執り行なわれるという。昔は一軒の法事を前夜から一日がかりでなされ、何ごとも家柄を重じるふうで、今日でも、百・百五十・二百・二百五十回忌の先祖供養がなされる習慣である。県外から入寺した現住職は、慣れるに十年かかったという。

A寺は、寺院護持の将来の見通しは明るい。

B寺

馬木の中心部より山間部に入った地区に、B寺・C寺はある。寺の裏山はそのまま中国山地比婆山連峰に連なり、広島県に隣接している。この辺が、馬木地区でもっとも過疎状態にあるところ。日尊が真言宗徒を破折し改宗させたB寺は、八十歳をこえた老住職夫婦が常住する住職寺である。減って檀家二十五軒ほど、住職は法務に専念、といっても昔は檀家数の一割の葬儀、檀家数の法事があり、布施収入があったが、近年は人がいなくなってそれがなくなり、

近くの寺に出仕するくらいだという。農地開放で寺庭婦人が勤めに出て寺族の生活をささえてきたが、いまは止め、生活費は年金が主、冬以外は作物をつくって自給自足をはかっている。護持会はなく、檀家負担にてどうにか課金が納められるが、檀家は生活には一切関知せず、寺の修理は住職個人で負担する現状である。それでも檀家はお盆・彼岸・お会式には寺に集まるそうだ。B寺の周りは十三戸の老人家族があるが、B寺・C寺周辺は挙家離村がはげしく、残っている農家も第二種兼業農家、出稼ぎ農家で、老人や奥さんが家を守っている状態、もちろん若い人はいない。いまのままでは、この先寺院の維持は困難であるが、教職にある息子が後を継ぐ予定ではあるという。横田町でも馬木は降雪が多く、寺の雪降しは人をたのんでするという老住職の話が、印象に残った。

C寺

B寺の近くにあるC寺も、置かれている状況はB寺と変わらない。住職寺であるが無住、庫裡は朽ちていまはなく、本堂のみが建っている。住職は他の市で教職についており、法務はB寺が兼務、護持会があって維持はされているものの、B寺に近く、共に檀家も少ないので合併との希望もあるが、檀家からは合併は好まれないという。B寺とC寺は、住職が親子関係にあるので、将来、B寺が後継されれば、あるいは兼務の形で、C寺は護持されていくかもしれない。

D寺

浄土宗徒を破折し改宗させた日尊創立のD寺は、その昔から阿闍梨寺と呼ばれ、阿闍梨号をもった僧でないと住職できなかった、寺格をもつ寺である。以来、出雲地方の日尊門徒の寺々の中では、寺格は常にトップに位置していた。したがって檀家もかつては二〇〇軒をこえていたが、創価学会の進出や住民の転出で、いまは一五〇戸ほどに減る。法務に専念していると話す住職は、檀家は公的な部分はみるが生活は援助しないので、他に内職をしているという。

檀家が減ってこまるとは住職の声だが、寺院護持は地区別評議員にて課金が納められており、他の寺院よりは檀家数からいっても維持できる状態ではある。入寺した頃は大変であったが、いまは安定しているという。子供はとついで後継者はない。周辺の農家は一様に車をもつようになって、路線バスは廃止の対象にあるという。しかし、やり方によっては、十分に運営できる寺院であるという印象を、訪れた者全員が同じにもった。

E寺

E寺は横田町中心部を見渡せる丘陵地にある、住職寺である。住職は教職に就きながら法務を勤めている。檀家八十軒ほどあるも、布施収入だけでは生活はむり、寺庭婦人がこの三月まで教職に就いて生活をささえてきたが、いまは止めて寺にいる。護持会にて課金などを出費するが、修繕などは住職負担。寺に対する檀家の関心は、干渉的でもなく、比較的高く、檀家は年中行事には必ず寺に参集する。月一回の題目講で檀家との交流をはかっているという。横田町中心部は山間部よりは若干人が増えているが、檀家は減少ぎみにあり、若い世代の少ない、老人世帯が多くなっており、その老人達も若い者を追って町を出る傾向にある。養子が来ない限り、後継者の将来の見通しは暗いという。

以上のことを若干まとめてみると、横田町における日蓮宗寺院の置かれている状況は、檀家の数や村の戸数の減少でB寺・C寺が深刻であるものの、全体的にみると、人口の動態がいまのところ定着する傾向をみせており、そうした状況から、昨年調査した山梨県早川町寺院の実態よりはまだ明るい状況ではある。しかし後継者難などの現状から、代務寺化から、将来、空寺化への線上にあることは否めない。

大森地区の場合

大田地区の調査は、大森石見銀山を中心に行なった。今日の大田市になるまでに四次の合併が行なわれている。総面積の七〇％が山林耕作地（内、山林五五％）で、農林の第一産業を主産業としてきた。一時五万人をこえた人口（昭和三十年）は、四十五年に四万人を割り、それ以後は横ばい状態である。高度成長期以後、農山村からの人の流出ははげしく、全人口の二〇％強が大田市街地に集中した。

大田市には、現在一三五の寺院が存在し、人口の割には過密状態にある。これらの中には、かつて大森石見銀山にあって、銀山の衰退で移転してきた寺院も多くある。真宗七十五カ寺、禅宗系二十六カ寺、浄土宗十六カ寺、真言宗九カ寺、日蓮宗九カ寺で、全寺院の約六割が真宗寺院である。また邑智郡でも七割が真宗寺院があるなど、石見地方は全寺院の半分が真宗寺院で占められており、いわゆる「石見門徒」と呼ばれるゆえんである。

大田市中心部より南に十二kmほど行ったところが大森町（石見と大森の二地区よりなる）である。かつて石見銀山で栄えたところである。銀鉱山で栄えただけに、銀山の衰微にともなって、町の衰退がみられた。江戸時代数万を数えた人口は、大正九年二三三七人に、高度成長期昭和三十五年には一二三六人にまで減り、現在は六二一人に激減している。

鎌倉時代末期に発見された石見銀山は、宝町時代中期、博多の豪商神谷寿貞によって本格的に発掘されていく。以来、中国地方の戦国大名の間で銀山をめぐって四十年余り、毛利氏が押えるまで争奪戦がくり返された。天文年間に銀の精錬技術が伝えられてから産出量は高まり、大永の頃から天正の頃までの約六十年間、石見銀山は最盛期であった。その後、銀山は、秀吉と毛利との共同管理をへて、徳川幕府の天領の銀山となって直接管理された。初代奉行大

久保長安らによって開発がすすめられるに及んで、銀山は第二の全盛期をむかえた。当時、「人口二十万、寺院百箇寺、一日に米を費やすこと千五百石…(中略)…家数二万六千余……」と記録は伝えている。しかし、江戸中期以後、銀の産出が著しく減少して、銀山は衰退の一途をたどる。江戸末期すでに休山状態になり、大正期に閉山となって今日に至っている。銀山はまさにゴーストタウン化の様相を呈し、昭和四十四年国の史跡に指定されたことによって、かろうじて町の活性が保たれている状況である。

かつて銀山には、百の寺院があったと伝えるが、現在、九十カ寺ほどの寺院が存在していたことが判明している。そのほとんどが、銀山二度の隆盛時の創立である。多くは室町期全盛の時に建てられたが、しかし銀山が衰微し、人が銀山より流出して集落が衰退する江戸中期になると、これに伴って多くの寺院が銀山より周辺(二〇km以内)に移転もしくは合併を行なっているのである。この現象は、いよいよダメになる明治初期にも集中してみられる。こうして大森町の寺院は、大正十一年で二十七カ寺に激減し、現在は十四カ寺が残っているにすぎない。そのうち住職常住は二、三カ寺のみである。

さて、銀山には日蓮宗寺院はわかっただけで八カ寺建立された。二カ寺創立不明、一カ寺江戸初期建立、他の五カ寺は室町時代の最盛期の創立である。

銀山四万平方メートルの区域の中に九十からの寺院が建立され、かつ活動していたのだから、その密度といい、銀山に出入りしていた人の数は大変なものであった。日蓮宗寺院は明治初めまで、他宗寺院にみられるような移転、合併することなく存続し得た。日蓮宗寺院の移転は、明治以後四カ寺の移転が行なわれている(内、一カ寺は移転したらしい)。合併はみられない。八カ寺中、三カ寺が残り、住職常住の一カ寺以外の二カ寺は、現在廃寺同然の状態である。

銀山の寺々は、数カ寺を除いていずれも小規模で、これらの移転・合併は、地域社会の変動、今日でいう銀山の過疎化が原因である。銀山の衰微で人口が流出し、集落が衰退した。それに伴って寺も動かざるを得ない状況に追いこまれたからである。すなわち、地域社会の衰退は、いやおうなく寺院の存在を左右し、寺々の移転・合併を招いたという図式が描ける。そこにとどまった寺院は、いまや廃寺同然の状態においこまれている。そして今日、大森地区は三度目の過疎にみまわれているのである。

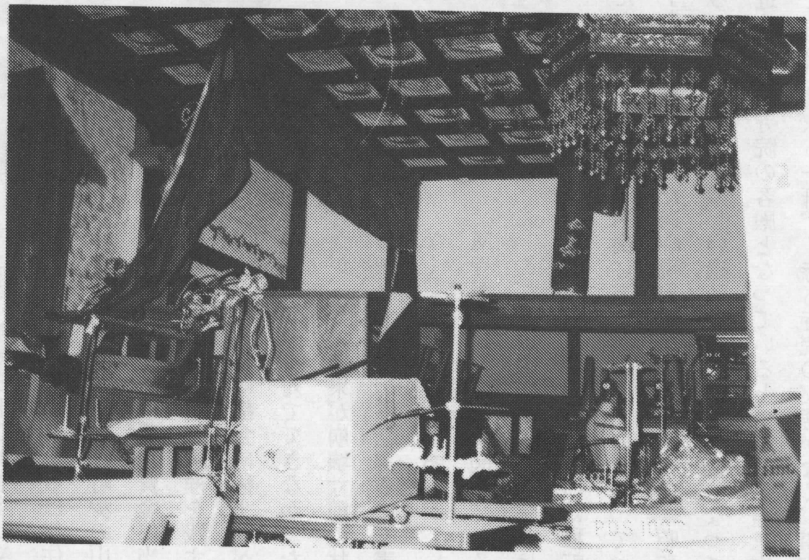
F寺は、銀山に残る三カ寺中、唯一の住職常住の住職寺、三十年ほど前入寺した現住職は、しばらく農業や土木仕事で生活をささえていたが、いまは年金と子供の世話で法務に専念できる状態にあるという。明治の初め頃、八十軒あった檀家は、いまは老人家族の二十余軒になり、町から出ていった檀家は、檀家としての機能がなく、数はあっても収入につながらず、護寺会は課金の出費だけ、住職のいる間は、寺院護持はできるが、孫に後継を期待しているとはいうが、将来の維持は見通しが暗い。

G寺は、本迹院の名で建てられ、銀山の繁栄と共に現地に移って寺号をはった。昭和十八年の大水害で本堂・庫裡共に土砂に埋まる。一時、仮庫裡に寺族や仏飯給仕の人が住んだが、いまは朽ちて無住、代務寺となり、宝塔だけが寺の所在を明かしているかのように建っている。祖師像は掘り出されて、現在F寺に安置されている。残った七、八軒の檀家はF寺に移った。移転、合併するにも法人の書類がなく、寺号あって実態のない状態で、事実上廃寺である。

このように、朽ちた本堂のみが残るか、あるいは寺号だけ残って仏祖三宝は他の寺院に安置されている寺院が、石見銀山の周辺には他に五カ寺あって、それらは寺院名簿上は教団構成の一寺院として記載されているが、現実は過疎のため実態のない状況にある。まさに寺院の崩壊である。

かつて三〇〇町歩の山林を持っていた**H寺**は、昭和三年入寺した住職が昭和二十五年まで常住していた住職寺であ

崩壊した某寺



倉庫に使用されている某寺本堂

ったが、檀家三軒では運営しきれず、住職はM寺に移ってからは無住の代務寺となった。三〇〇町歩の山林は寺の借財の返済や運営資金に当てられて、いまは本堂と庫裡を残すのみ。昭和三十一年に都会に移す話が出たが、檀家の反対でできなかったというが、その結果が崩壊寸前の状態になった。合併、移転するにも書類がなく、現状のままであるが、いまはM寺が寺観の復興を図っている。

これら銀山に残った寺院とは別に、銀山の衰退に伴って、他に移転した日蓮宗寺院が四カ寺ある。一カ寺は定かでないが、移転したらしい。いま大田市街にあるが、本堂のみ残っており、活動は停止。まず、大正十三年に邇摩郡大国村に移転したI寺は、当時はまだ過疎現象もなく大層栄えて、昭和三十年頃まで住職が常住していたが、いまは代務寺となっている。I寺の周辺は激しい過疎で小学校が廃校となって縫製工場に変った。昭和五十年頃まであった庫裡は、売られて近くの真宗寺院の客殿となっているという。仏祖三宝が他寺に預けられ、残った本堂はいま縫製会社の倉庫に使われている。檀家も一軒、I寺も寺院の実態がなく、事実上廃

倒壊したままの某寺本堂跡

寺である。移転するにも、移転先を選ばなければならないことを、Ｉ寺は教えている。

これに比べて、明治三十四年に県内平田市へ寺号を移転したＪ寺と、昭和八年に埼玉県行田市に移転したＫ寺は、再興され、現在、教化の拠点となっているのである。

石見門徒の根強い、邑智郡の川本町には、阿闍梨寺であった、住職常住の住職寺Ｌ寺がある。ここも過疎のあおりで二十年で三五％の人口減少をみた。檀家三十戸ほど、住職は他の職につきながら法務を勤めてきた。寺庭婦人は生活苦のため子供のところに同居している。昭和十八年の江の川のはんらんで本堂・庫裡が床上浸水にあい、かろうじて仏祖三宝像は水につからなかったという。十年に一度は水害にあい、四十七年の水害以来、本堂はたたみがひけない状態にある。そんなことで後継者全くなし。

石見銀山の積出し港として開かれ、栄えたところに、温泉津（ゆのつ）がある。温泉津より降露坂を経て銀山に至る路があって、かつて銀山街道と呼ばれ、銀や物資の荷馬車が往来した。温泉津は銀山と共に栄え、衰退したのであるが、昭和五十五年までの二十年間で人口が半減した。

Ｍ寺は港が開かれると時を同じくして創立され、塔中に末寺があった（いまは廃寺）。過疎で檀家も減り、護持はきびしい状況にあったが、現住職の信者を対象とした活躍で檀家も百軒ほどになって寺観が一新、今回調査の中で、ここ一カ寺が、住職のいかんで発展する寺院の姿をみたおもいであった。

結局、現在、大田市には九カ寺の日蓮宗寺院があって、住職が常住して活動しているのは三カ寺、残り六カ寺は、檀家もなくなり、本堂のみ建って活動停止、あるいは宝塔のみ残って寺院の崩壊を来たしている、実態のない現況である。本堂がなくなったり、朽ちている姿は、あまりにも無惨であった。

まとめ

現宗研は、昨年度の山梨・福井両県の寺院調査から、過疎によって檀家の挙家離村が進んで寺院がひへい化を来たし、その結果、住職は兼職、あるいは兼業してかろうじて現状を維持し、そうした生活苦から後継者難を招き、寺院の無住化や代務寺化が進んでいること、そしてそれがやがてあき寺に至るであろうこと、つまり寺院の活動停止の現状から無住寺・代務寺化をへて自然の荒廃にまかせて寺院の崩壊・廃寺に至るという図式が描けるのではないか、と考えた。

その後、島根県の過疎地域の寺院を調査して、図らずも憂えていたことをまのあたりに目にしたのである。寺院名簿に日蓮宗寺院として記載されているものの、石見銀山にみられた寺院の中には、現実には寺院の崩壊を来たしているのが実態としてわかった。調査を通して、寺院の存続には、地域社会の変動に大きく関わっていることが、昔も今も共通していることがわかる。過疎にある地域では、地域社会の活性化が行なわれない限り、そうした寺院の存続は非常に困難である。地域社会の衰退は寺院の移転・合併・解体をいやおうなしに招く。石見銀山において、もちろん移転先が問題ではあるが、移転した寺院は今日復興され、現地にとどまった寺院は檀家はあっても地域社会の変動によって離散して廃寺の一途にあり、事実上寺院の崩壊に至っている現況である。

また、調査では、①檀家があっても、住職の常住しない寺院は廃寺に至る可能性があること、②そしていままで寺院をささえてきた檀家制は、寺院の存続において必ずしも絶体的でない。それは過疎農山村地域で顕著になりつつあること、③今日の寺院は、檀家制云云以前に、社会の変動や人の動きにはっきりと左右される位置にあること、④廃寺寸前まできながら、おれ達の寺だといって移転や合併を執拗に拒んでいると、結局、廃寺同然に至り、ひいては寺

院の崩壊を招かざるを得ない状態になってしまうこと、などが改めて知らされたおもいである。

新寺建立のむずかしい今日、時には、寺院も人の動きの変化に応じてところを動かなければならないと感じたのは、実地踏査した者の共通した意見であった。教化拠点のない都市の過密化、一方で農山漁村の過疎化、この変動のますます激しくなる将来、過疎地域の寺院の活性の考えられる方向は、一つは寺号・法人でもよいから移転させて寺院の機能の可能性を求めることにあるのではないかと思うのである。

二、隠岐島寺院調査

久住　謙是
（現代宗教研究所調査主任）

隠岐の現状

島根県寺院調査は、その過疎問題を考えるとき、隠岐島を除いては考えられない。

島根県寺院調査の一環として、隠岐島調査は、昭和五十九年五月二十四日（木）から二十六日（土）まで実施した。二十四日、羽田空港を午前七時に発ち、九時三十五分、島後隠岐空港に着き、西郷町A寺および廃絶寺の調査、夕方西郷港から、島前菱浦港へ渡り宿泊、二十五日は、海士町のB寺・C寺の調査および役場・郷土資料館へ、夕方、日